怪しの熊野

其の十三 「栄螺鬼（さざえおに）と桂男」

和歌山大学
システム工学部
環境システム学科
中島敦司教授

太地周辺の海に出没した「栄螺鬼（さざえおに）」は、30年生きたサザエが女の姿に化けた妖怪だ（イラストはBoBO）

紀州の波切（太地町）の言い伝えでは、かつて海で溺れていた美女を海賊が見つけ、下心をもって助け上げ、皆で女に乱暴したが、実は女は「栄螺鬼（さざえおに）」が化けたものであり、海賊たちの睾丸（こうがん）をすべて食いちぎってしまった。海賊は睾丸を取り戻すため、栄螺鬼に莫大（ばくだい）な黄金を支払った、という話がある。栄螺鬼は30年生きたサザエが化けたもの、もしくは好色な女が海に投げ込まれてサザエと化し、さらに歳月を経て化けたものとのこと。月夜に海上に姿を現し、浮かれたように踊り出し、その姿は龍のように見える、という伝承もある。

下里に出没した「桂男」は、絶世の美男子で、月から女性を招き、その命を縮めてしまう（イラストはBoBO）

千葉県の房総半島の言い伝えでは、一人旅の女性が宿を借りに来るのは「栄螺鬼」で、泊めた家は亭主を取られる、もしくは亭主を殺されるといって恐れられた。房総にはアワビが化けた怪物もいる。房総半島と紀伊半島は、何かにつけ共通点があるが、妖怪話でもつながっていることが分かる。美女に近づくと危険だということを想像させる妖怪は多いが、「栄螺鬼」は以前紹介した山中の「肉吸い」のように、いきなり命を奪うまでの危険な妖怪ではなかった。なにせ、乱暴された仕返しだったわけなのだから。

一方、現在の那智勝浦町の下里には「桂男」が出没したという。江戸時代の『絵本百物語』には「月の中に隅あり。俗に桂男という。久しく見る時は、手を出して見る物を招く。招かるる者、命ちぢまるといい伝う」と書かれている。絶世の美男子で、女性を招く。月の模様は桂男が桂の巨木を切っている姿だという中国の伝承と関連がありそうだ。現在でも下里付近の男性には鼻筋の通ったハンサムさんが多いが、桂男が美男子だったこととは偶然の一致だろうか？

桂と月の話は、渡来人「秦（はた）氏」との関係で語られることもある。秦氏の伝承は熊野にもあるが、ユダヤ人だったなど興味深い話まである。美男子と渡来人には関係があるのかも知れない。いや、そうではなく、女性の皆さん、桂男のようなハンサムさんにはご注意あれ、という話だろうか。美女は栄螺鬼や肉吸い、美男は桂男。美しい異性に安易に近づくと危険だという教訓は、今も昔も変わらないのだろう。

中島敦司（なかしま・あつし）教授プロフィール

昭和38年、岐阜県生まれ。三重大学大学院生物資源研究科博士後期課程を修了。平成8年から和歌山大学システム工学部講師、12年から助教授。19年から教授。51歳。専門は森林生態、自然再生、砂漠緑化、海岸林再生、地域資源、地球温暖化、自然エネルギー、民俗（妖怪、伝承）。NPO活動にも力を入れる。熊野方面には年間30～50日は訪問し、研究する。